九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

世界経験をめぐる有限性

廣田, 智子
九州大学大学院人文科学研究院

https://doi.org/10.15017/1456215

出版情報：哲學年報. 73, pp.19-36, 2014-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

世界経験をめぐる有限性

廣田智子

はじめに

世界とは何か。周知のようにハイデガーは『存在と時間』[1]（一九二七年）において、人間という存在者を現存在と規定する。現存在という術語が意味するところは、あらゆる存在者がわれわれに対して現れることを可能にするような存在が開示され、存在を理解しているということである。存在者のすべては世界において現れるのであり、存在の開示とは、換言すれば、世界の開示である。

世界とはあらゆる存在者がそのうちで出会われる全体的な場であるため、一対象として認識できるかたちではわれわれに与えられない。しかしながらこのことは、現存在が世界に関して何も知りえないということではない。われわれは事実、気づいたときには世界の内にすでに投げ込まれており、世界やその内で現れている存在者について何らかの理解を有している。この意味において世界とは、何らかの仕方で人間が経験してしまっているものである。それゆえ現存在は、世界と切り離されて無世界的で孤立した主観として存在しているのではなく、根本的に世界の内で存在者と慣れ親しんで交渉しているという在り方をする、「世界―内―存在」なのである。

それでは、われわれが世界における自身の経験を不当に超えて世界を対象化することなく、あくまで経験に内在的な仕方で世界を捉えるとすれば、世界はどのようなものとして扱われるべきであるのか。また、われわれが

世界という場を離れて外から対象として扱うということを回避するためには、どのような接近方法において世界は明らかにされてくるのであろうか。われわれの世界経験の限界を見定めることはまた、われわれ現存在の有限性を見つめることになると思われる。

本稿では『存在と時間』から一九三〇年までのハイデガーのテクストを扱い、世界概念の深化をその解明方法との関連において考察する。この時期には世界についての考察が集中的に取り組まれており、その到達点は彼の後の思索の展開の原型となっていると思われるからである。そこで、論述の構成は以下のようになる。まず、『存在と時間』における世界概念について検討する（第一、二章）。次に、メタ存在論の構想において明らかにされる、存在者の只中への現存在の被投的側面を考察することによって、『存在と時間』における世界開示からの変容を跡づける（第三章）。最後に、これらを踏まえて一九二九／三〇年冬学期講義『形而上学の根本諸概念』では「世界形成的」とされる現存在の規定に即して、世界の構造を確認する（第四章）。

一　『存在と時間』における世界概念

『存在と時間』においては、存在を理解している現存在を出発点として存在の意味を解明しようとする、「基礎的存在論」の構想のもとで現存在の分析がなされている。現存在は意識的に自分自身や世界の構造を理解するに先立ち、世界においてすでに世界の内部で出会われる存在者に関わっている。この事実が、世界や自分自身の存在を理解している現存在に定位して分析されることになる。

さて、世界という言葉はわれわれの日常では多義的に使用されている。それは例えば「世界の内部で事物的に存在しうる存在者の一切」であったり、数学者の「世界」というように「存在者のそれぞれの多様性を包括する領域」であったり、あるいは現存在がそのうちで生活している「公共的」な「世界」などを意味するとハイデガー

は指摘している（SZ, 64f.）。だが、『存在と時間』においてハイデガーが解明しようとする世界はこうした諸々のものではなく、「世界性」として明らかにされる。

「世界性」は、日常的な「環境世界（Umwelt）」において、すなわち現存在と世界内部的存在者との「交渉（Umgang）」の場面に定位して捉えられていく（SZ, §15～18）。そこにおいて存在者は道具的な存在者として、何の「ために（Um-zu）」使われるのかということにおいて理解されて出会われている。例えば現存在は、釘を打つために使用されるものとしてハンマーを見る。現存在の世界内における存在者との出会いにおいては、道具的な存在者の存在性格は、現存在が自らを何であるどのように了解しているかということと切り離して考えることはできない。たとえば、自らを日曜大工として理解している現存在がいるからこそ、ハンマーは釘を打つためのものとして理解され、現存在が風雨をしのぐために板を打ち付けるというためにそのハンマーは「手頃である」あるいは「重すぎる」というふうに出会われている。このような現存在の自己自身についての存在了解は「究極目的（Worumwillen）」と呼ばれる。

現存在が日常的に親しんでいる世界は、目的－手段から成る道具的な存在者の連関を現存在は理解しており、現存在はそのつどの自身の目的に応じてその目的－手段から成る連関を分節化している。こうした現存在と存在者との関わりを可能にするような場が世界の構造、すなわち「世界性」であり、それは「有意義性（Bedeutsamkeit）」（SZ, 87）と規定されている。ここにおいて世界は、現存在と切り離されて対象化されたり静的で固定的な在り方をするものとして捉えられたりすることはない。世界性は、存在者と出会うために現存在にあらかじめ開示されている、そのつどの背景的なコンテクストとして機能するものである。世界の開示とは、現存在とは無関係な対象があらわになることではない。それは、現存在が世界の内で存在者と関わるということにおいて、自身を理解することなのである。

ハイデガーはこうした世界と現存在との統一的なあり方を捉え損なうものとして、世界と現存在とを第一次的にはそれぞれ別個のものとして扱う、世界の「客観化（Objektivierung）」ないし「対象化（Gegenwärtigung）」という方法を批判している。客観化は第一次的には「事物的存在性（Vorhandenheit）」に定位したうえで、最も基底的な存在者の存在である物質的な自然の上に価値的な述語の諸層を重ねることで、世界を再構築しようとする。だが、客観化は世界の世界性を飛び越してしまい、世界を再構築するために必要な全体性をつくりだす「設計図」を欠いたままになってしまう（SZ,65, 98f.）。あるいは客観化は、世界と現存在との統一的理解における存在者の道具的性格を看過し、現存在を主観として、そして世界を主観と切り離された事物的存在者に定位して捉える。

こうした前提に立てば、無世界的な認識主観から出発して経験対象としての「客観的な」世界を証明しようとするような、外的世界の存在証明が哲学的な問題として浮上してくる。しかしながらハイデガーによれば、哲学の議論においてこの証明を試みようとすることは「哲学の醜聞」（SZ, 202ff.）であると断ぜられる。主観と世界とを事物的存在性に定位して扱うこの証明の問題設定は、上述した、現存在は気づいたときにはすでに存在者と出会い行為しているという現存在と世界との統一的なあり方を捉え損なっている。そのため、外的世界の存在証明は世界現象を捉え損なって無世界的な主観を前提にすることによって生じる疑似問題だからである。

二　『存在と時間』における世界開示の問題点

それでは、そうした世界性が現存在に開示される在り方（開示性）は、どのようなものであろうか。ここでは、『存在と時間』における現存在の有限性を、世界の開示との関連で考察し、われわれの世界経験の限界を吟味していきたい。

『存在と時間』において世界の構造は、世界の内ですでに存在者と親しんでいる現存在が、自己を解釈するという営みにおいて主題化されている。現存在には、存在者の現れを可能にする世界と、現存在自身とが「現にそこに（da）」存在しているという事実についての理解が存する。この、現存在が世界の内で存在しているという事実が現存在に明らかにであるということが「開示性（Erschlossenheit）」である。開示性は「了解（Verstehen）」、「情状性（Befindlichkeit）」および「語り（Rede）」という三つの契機によって構成されている（SZ, § 29 ～ 34）。

了解は現存在の行為の自己目的を「企投」するという性格に対応し、情状性は現存在が世界の内へ投げられてあるという「被投」の事実をあらわにし、語りは了解および情状性によってそのつどの振る舞いの背景として機能する開示性を分節化するものである。了解と情状性の両契機は、相互に還元不可能なものであって、各々が根源的であるので、「等根源的」（SZ, 133）なものである。この両者は互いに還元することができないものでありながらも、両者はともに時間性の時熟にもとづいて協同して開示の働きをなす。

時間性においては、企投性は到来に、被投性は既在性に対応している。そして本来的な時間性は、「先駆・取り返し・瞬視（Vorlaufen・Wiederholung・Augenblick）」という仕方で時熟するのだが、その際に到来が一つの優位をもつことになる（SZ, 329f.）。本来性においては、到来という自らの目的の企投に定位して、自身がそのうちへと投げ込まれている被投的な事実を捉え直し、現在の状況を開示する。開示性において企投性格をもつ了解と被投性をあらわにする情状性とは等根源的であるとされながらも、現存在に世界が開示されるあり方は、その根源的な次元においては、現存在の最も固有な自己目的を企投することにもとづいて分節されることになるのである[2]。

それでは、企投性格の重視というのは、現存在の意味構成によって世界の開示がなされるということを意味するのであろうか。先述したように、有意義性の指示連関（世界性）は現存在の目的のもとで有意義化されている。

例えばハンマーは杭を打つことのもとで「適所性（Bewandtnis）」を得るが、このハンマーは現存在が安全に家屋に住まうという目的において描かれる状況においてそのように有意義なものとして存在している。存在者が適所を得て有意義なものとして出会われていることは、現存在の側から言えば、「適所を得させること（bewenden lassen）」、「存在させること（sein lassen）」となる。この「…させる」という表現は、主観による価値付与や主観の気ままに存在者を従わせるかのような、存在者の意味が主観の認識能力や実践能力に根拠をもつものであるかのような印象を与えるかもしれない。

しかしながら事態は全く逆であり、「存在させる」ということは、存在者をそのあるがままにあらしめるということなのである。存在論的には適所全体性や有意義化から成る世界性を基盤とした「解放作用（freigeben）」（SZ,85ff.）であって、現存在が世界性によって描かれている下図に従うことで現存在の振る舞いが可能になっているのである。

日常的に出会われる道具、例えば製品のうちには同時に「材料」への指示がひそんでおり、例えば革製品はなめし革や動物を、ハンマーや杭は鋼、鉄、銅、岩石、木材を、そのもの自体で指示している。現存在がどのように意図しようとも、布はそれ自体で帆船が風をはらむためには有用ではあっても風雨をしのぐためには役に立たない。道具的存在性が現存在の意図や価値附与とは独立であるということはまた、道具が使用不可能であるときに「目立つ」ということにおいても考察される。存在者は現存在の目的とむすびついて現存在に出会われるのではあるが、それはあくまでも現存在の意図や目的からは独立に存在しているものとしてなのである。

「そのもの自体では作りだされる必要はなく、つねにすでに道具的に存在している存在者」や「自然産物という光のうちで見られた『自然』」もともに暴露されて有意義性の指示連関を成しており（SZ,70）、世界性の連関はそもそも存在者「自体」によって下図を描かれているものなので、主観の価値付与に還元してしまうことがで

きないものである。そうした世界性を理解していることによって、現存在は存在者と出会うことが可能になっているのであるが、その理解の地平において、存在者が現存在の目的に応じたものやそぐわないものとして、自身の姿を示すのである。

それゆえ、企投性格の重視というのは、現存在の意味構成によって世界の開示がなされるということではない。「適所を得させる」というのは主観の実践能力によって基礎づけられる事態ではなく、適所を得させようとする意図にそぐわないものとして存在者が現れるための条件にもなっているのである。したがって、適所を得させるという現存在の目的に応じた世界性の分節は、或る存在者を「それがいまや存在しているとおりに、また、それがそのように存在するように」（SZ,84）存在させるということなのである。

ところが、こうした企投の重視にはやはり問題が残るように思われる。というのも、現存在の目的に応じて世界性が分節化されるとすれば、現存在のそのつどの「目的に適うもの／適わない」ものという観点の限りにおいてのみ、存在者は現れるからである。例えば、現存在が家屋の外壁を補強するという場合を考えてみよう。現存在が住まうために家屋の補強をするという目的がされれば、そこで出会われる存在者は、その目的に適うもの（手頃な板、ちょうど良い大きさの釘、作業するのによい天候）や、目的に適わないもの（作業の邪魔になる強い風、ぬかるんだ地面、補強には使用できない庭木）などである。だが、われわれはそうした（意識していたり意識していないかたちでの）目的とは関係なく、野に咲く花に不意に目を奪われることがある。また、ふとした風に厳しい冬が近づいてくる気配を感じ、しばらくのあいだ心を奪われることもある。こうした、世界の中で存在者と関わっていることにおいて現存在が絶対的に蒙るという契機を、現存在の目的に応じた世界性の分節化、すなわち目的企投の重視においては説明できないのである。

三　世界概念の深まり

『存在と時間』において世界は、目的-手段の連関から成る「有意義性の指示連関」として、主として現存在の振る舞いとの連関で捉えられているが、『存在と時間』公刊後の形而上学期においては「全体としての存在者」を問題にするメタ存在論との関連で捉え直されることになる(3)。

『存在と時間』においては、世界が開示される条件として現存在の了解の構造が分析されていたのだが、一九二八年夏学期講義『論理学の形而上学的始元根拠』において明示的に、現存在の存在了解に先行する「全体としての存在者」を扱う「メタ存在論（Metontologie）」のプログラムが計画される。「メタ存在論」は、現存在の存在了解に定位する『存在と時間』の基礎的存在論のプログラムに加えられ、ハイデガーの構想する「形而上学」はこれら二重の課題を展開することになる。この講義において、次のように述べられている。

「存在が与えられているのはただ現存在が存在を了解しているときのみである。言い換えれば、了解のうちに存在が与えられているという可能性は現存在の事実的実存を前提にしている。そして現存在の事実的実存はさらにまた自然の事実的な事物存在（das faktische Vorhandensein）を前提にしている。根源的に立てられた存在問題の地平においてまさに、次のことが明らかになる、つまり、こうしたすべてのものが見えるものとなり存在として了解されるのは、存在者の可能的総体がすでに現にあるときのみである。ここから、全体としての存在者（das Seiende im Ganzen）を主題とする、固有の問題構制の必然性が生じる。

この新たな問題設定は存在論自身のうちにあり、存在論の転化（Umschlag）、μετάβολή から生じる。この問題構制を私はメタ存在論と名づける。」（GA26, 199）

『存在と時間』における基礎的存在論の遂行においては、現存在の事実的実存を前提にした存在了解が分析の対象となった。この分析においては現存在が自身を企投するという側面に重点がおかれることになる。ハイデガーはこれと併せて、現存在がそのうちに投げ込まれて巻き込まれている「全体としての存在者」について解明する必要がある、と述べているのである。すなわち、現存在が存在者との関わりのなかに投げ込まれているという、被投的な契機が詳しく考察されることになる。「全体としての存在者」を扱うメタ存在論においては、現存在が全体としての存在者の只中に被投され、現存在の意のままにならない、すでにある存在者を受容するという事実に焦点があてられることになるのである。

ここでは『形而上学の根本諸概念』を除いて、同時期に成立した一九二九年の講演『形而上学とは何か』と論文『根拠の本質について』とを取り上げて、世界と現存在との関わりを追っておきたい。前者は「存在者ではない」ということである「無」(Nichts)を考察しており、存在者の方から経験された存在を扱っている。後者でハイデガーは「存在論的な差異」を挙げており、これは存在者と存在とのあいだにある「無い」(das Nicht)ということである。

『形而上学とは何か』でハイデガーは、形而上学の本質を、「無」と現存在の「超越」という事象との連関において考察している。無において現存在がそのつど全体としての存在者を越えているという事態が「超越」と名づけられ、洞察されていく。「無」[4]は、現存在の根本気分としての「不安」においてあらわになる。「存在者ではない」という「無」は、存在者が退くということにおいて、通常の対象的存在者との関わりに対してはあらわになることのない、全体としての存在者を開示する。存在者が全体として滑り落ちることにおいて、無ははじめて存在者を存在者としてあらわにする。

「存在者が全体として退くこと、そのことが不安のうちでわれわれに周囲から押し迫るのだが、そのこと

がわれわれを圧迫する。何も拠り所はない。ただこの「何も無い」だけが残されてあり、―存在者が滑り落ちていくことのうちにあって―われわれを襲う。」(GA9,112)

『存在と時間』において本来的な開示は、人間の「決断」という目的企投にもとづいていたのに対して、ここでは、この世界の際立った経験は現存在の決断と意志によるものではない。むしろ、現存在が襲われるという受動的な経験である。

たしかに、不安における世界や存在者の際立った開示は、『存在と時間』においても言及されている。不安の対象は存在者ではなく世界そのものであるとされ、不安において「それは無であって、どこにもない」ということがあらわになる(SZ, 186)。しかしながら『存在と時間』では不安における世界の開示は、世界と対照させられるという仕方で現存在の「決断」の場面へと至り、現存在の企投性格の強調となっている。これに対して『形而上学とは何か』においては、現存在には自分自身をも含めて拠り所となる存在者は見当たらず、自身の決断をも含めた何ものをも世界開示のための絶対的な支柱とはなりえない、とされる(GA9,118)(5)。不安における無の開示は、存在者の全体と対比的に現存在を浮かび上がらせることでもなければ、「存在者の全体をそれ自体において把握する(das Erfassen des Ganzen des Seienden an sich)」ということでもない。そうではなくてそれは現存在が自分自身を、「全体としての存在者の只中に自身を見出すこと(das Sichbefinden inmitten des Seienden im Ganzen)」(GA9,110)なのである。

「不安において我々は言う、「誰となく何かしら不気味である(es ist einem unheimelich)」と。この「何かしら」と「誰となく」とは何を意味するのか。我々は何に面して不気味なのか、言うことができない。全

体としてそうなのである。」（GA9,111f.）

「無」は我々に、日常的にそれまで没入していた世界内部的な対象となる存在者の連関である世界連関の枠組みを緩める。そして「私」という世界内部的な存在者の規定も揺るがされて、「誰となく」という者になった「私」という現存在の自己の前に無が浮遊し、全体としての存在者があらわになることになる。

存在者が「全体として」われわれを襲う「不安」という根本気分においてはまさにあれやこれの対象がではなく、あらゆる物や人間そして自分自身をも含めた存在者が「全体として」或る無関心さのうちに沈む。あらゆる存在者を対象化することが不可能になるなかで、不安という根本気分においては自身をも含めた「全体としての存在者」が現存在の意のままにならないかたちで開示されるのである。

ここにおいて世界と現存在とは対比的に露呈されるのではない。現存在とあらゆる存在者、そして存在者の現れを可能にする世界とが、統一的な連関を保ったままに、「全体として」あらわになるのである。「無」が「私」をも含めた世界内部的な存在者の規定そのものを一つの問いに付すとされるのだが、無は単なる存在者の否定ではなく、存在者を不審さにおいてあらわにしつつ存在者を存在者としてはじめてあらわにするのである。すなわち無は現存在と存在者とを両者の統一的な全体として開示するものとして、「人間の現存在にとって存在者そのものが開示されうることを可能にするもの（die Ermöglichung der Offenbarkeit des Seienden als eines solchen）」（GA9,115）なのである。

『根拠の本質について』においても「存在論的差異」が、先の講演と同様に、やはり現存在の超越から主題化される。そこにおいては、存在者がそのもの自身において開示されるという存在了解の、すなわち、存在者とのすべての関わりの「根底」に存するものの「根拠づけ」ということが問われる。根拠づけはまた、「何故とい

う問い一般を可能にすること」（GA9,168）でもある。こうした存在者の開示を可能にする超越は『根拠の本質』において、「建立・地盤の受け取り・根拠づけ」という三肢的な基づけの構造への「分散（Streuung）」として示される（GA9, 165f.）。「建立」は存在者を越えて現存在の目的を与える世界を企投することを、「地盤の受け取り」とは乗り越える存在者によって捕捉されることを意味しており、第一の基づけと第二の基づけとが「同時的」にあることで、存在者のうちに地盤を受け取るという「根拠づけ」がなされる。

『存在と時間』における世界の開示はここにおいて世界の建立として捉えられるのであるが、それはもはや現存在の企投に優位が与えられることはない。ペゲラーの指摘するように、存在者が存在者として開示されるようになる「超越」の生起は、現存在の自由にならないこととして、根拠が離脱してしまっているという「深淵」として理解される(6)。

現存在の企投に出発点が置かれた基礎的存在論の構想のもと、『存在と時間』においては現存在の目的企投によって世界や存在者の開示が変容させるとされていたのであるが、現存在の被投的側面に光が当てられるメタ存在論のプログラムと相補的に捉えられることによって、現存在と世界との相互関係が、被投と企投との相互転化という二重性において捉えられる。「現存在は、存在者の只中にそれ自身を基づけつつある場合にのみ、世界を基づける（建立する）」（GA,167）とされ、存在者の現れを先行的に可能にする世界企投は、存在者の只中で気分づけられているという現存在の事実によって基づけられることになる。ここに、相互循環的な関係性が剔出されているのである。

四　世界開示の有限性

一九二九／三〇年冬学期講義『形而上学の根本諸概念』において、人間の世界との関わりは「世界形成

（Weltbildung）」として解明される。ここで世界は、「全体としての」存在者を存在者「として」開示するという契機、すなわち、「存在者としての、および、全体としての存在者の開放性（die Offenbarkeit des Seiendes als solchen und in Ganzen）」（GA29/30,420）と見なされ、「存在者としての存在者」を扱う基礎的存在論と「全体としての存在者」を扱うメタ存在論とを課題とする形而上学構想が一つの集約点を迎えることになる。

「全体としての」と「として」という二つの契機と、さらに「拘束されることを自ら進んで差し出す」（GA29/30,506, 510f.）という三つの契機によって統一をなすのが、「世界形成の根本構造」（GA29/30,526）として捉えられる企投である(7)。この構造においては、『存在と時間』と同様に「企投」という術語が用いられているのではあるが、その自己目的が強調されるのではなく、とりわけ存在者に「拘束されることを自ら進んで差し出す」ことに重点が置かれる。つまり、自己目的にもとづいて世界を分節化するのではなく、存在者に気分づけられるというかたちで襲われることを、企投において能動的に受容する働きが重視されるのである。われわれにはわれわれを拘束するものが何であるのか、そうした拘束可能性は何に基づくのかということは知りえず、ただわれわれは拘束性に支配されているだけである。

> 「企投とは可能ならしめる働きに対して自分を開くということである。（中略、原文改行）このような、可能ならしめる働きがなす覆蔵解除（*Entbergen der Er-möglichung*）としての企投することが、存在と存在者とのあいだの区別という生起なのである。企投はこの区別の「中間（Zwischen）」の中への突入である。企投が初めて、区別された両者をそれらの区別可能性において可能ならしめる。企投が存在者の存在を露呈する。」（GA29/30,529）

「企投において、存在者の存在が、存在者のそのつどの可能的な拘束性の全体において支配するようにさせる」、ということが生起する。「企投において世界が支配する」（GA29/30, 531）と述べられるが、ここにおいて企投は、世界の開示構造を構成する一契機ではなく、世界と現存在との関係の根底にあってそうした関係性そのものをひらく営みとして、深化して捉えられている。企投において拘束するものへと自身を差し出すことは、拘束する存在者がその全体において、現存在を支配してくるということである。その際に現存在がいかに目的を意図しようとも、そうした意図を超えて、現存在は拘束されるのである。

それは、社交的に人々と歓談を楽しむことを意図しているときですら、「なんとなく退屈だ」という気分が現存在を襲い、全体における存在者が「あらゆる視点に関して、あらゆる意図において、あらゆる顧慮に対して、言うことをきかない」ということがあるほどに、根源的に現存在を規定するものなのである。現存在に対して存在者が現れることを条件づける時間の地平は、もはや現存在が手出しすることができるものではない（GA29/30, 221）。地平という、現存在に全体における存在者を露にし、存在者としての存在者へと接近可能にさせるものが、現存在が被投的な事実によって規定される「気分づけられる」という契機によって、全体において言うことを聞かないものとして自らを告示するほどである。

したがって、自身を投げるという企投はそれのみで世界を開示するのではなく、投げられたものとして自身が拘束されるという被投的側面へと転化し、投げられたものとしての現存在を、われわれの可能性を「可能ならしめるもの」に拘束させることにおいて開示する。それは、『存在と時間』においては、現存在の企投の「決断」という在り方が開示性を変容させるものとして非常に重く見られていたのに対して、次のように言われるほど、企投における受容的側面が強調されるのである。

「実存の根本性格は、つまり人間が実存することの根本性格は、決断（*Entschlossenheit*）という点にあるのだが、この封鎖解除即決断なるものは、私が持っている直前的な一状態ではなく、むしろ逆に、決断の方が私を持っているのだ、ということが看過されている。」（GA29/30,427）

人間は世界を開示させるのだが、それは、可能ならしめるものへと自身を解き放つということでもって、全体的な存在者の只中で現存在を気分づけられるという仕方によってである。現存在がいかに企投しようともそれのみで世界は開示されるのではない。全体における存在者が現存在をいかに気分づけるかによって、全体における存在者の只中で可能的なものが開示されるのである。

「この企投において、存在者の存在が、存在者のそのつどの可能的な拘束性の全体において支配するようにさせる、ということが生起する。企投において世界が支配する。」（GA29/30,530）

現存在が世界へと関わることにおいて、存在者の只中で拘束されることによって、逆照射的に各々の現存在にそれ固有の可能性が与え返される。人間が世界を開く「世界形成」企投というはたらきは、可能なものに自身を委ねて拘束させるという受容の営みにおいて、徹底的に被投性に貫かれているのである。それは、人間が世界を創造するということではなく、存在者や世界を受容するものであるという点で、有限的な関わりなのである。この有限性は、現存在の受容性格を単に述べているだけではない。現存在は、一方では全体の中へと進み入ろうとしつつも、他方では受動的なものとして、全体における存在者が自身を示したり退いたりする仕方で支配してくることに応じて、存在者の全体の中に安住してしまうことはできない。こうして一方と他方のどちらにも安住す

ることはできず、一方と他方との相互の途上で、絶えず揺れ動く不安定なものなのである。

終わりに

『存在と時間』における現存在分析は、現存在の存在了解という企投的な側面に定位したものである。それゆえ世界や現存在の開示性は自己目的の企投に依拠して、本来的には現存在の「決断」に対応して変容するものとして考察されていた。しかしながらこれは、世界の開示が現存在の意志によって基礎づけられるということではない。

『存在と時間』刊行後にハイデガーはメタ存在論との関連で、現存在の被投的な事実を開示する「不安」や、「退屈」といった「気分」に際立った開示の機能を見出した。不安や退屈といった根本気分においては、現存在が存在者の只中に投げ込まれて、そこにおいて気分づけられた在り方で自身や世界を見出すという、被投的な側面が開示されることになる。一方では世界の開示は現存在の決断によって変容するのであるが、他方、現存在は気分に襲われるという仕方で、世界の方から自身の理解の変容を迫られるのである。

現存在が世界のなかで気分づけられているという、現存在と世界との関わりにおいて捉えることで、ハイデガーは世界における現存在の振る舞いを、その場から乖離して俯瞰することなく、あくまでも経験に内在して考察している。そこにおいて世界の開示は、現存在の決断といった意志的な振る舞いによってのみ一方的に根拠づけられるものではなく、その根拠を問うことができないながらも、現存在を気分づけるという仕方でもまたあらわになる働きとして明らかにされている。

本稿では一九二七〜三〇年のあいだの世界概念について考察してきたが、一九三〇年以降の思索の変遷を踏まえつつ、『芸術作品の根源』において大地との拮抗関係で論じられる世界についての解明を今後の課題としたい。

註

（1）ハイデガーの著作については、次の略号を使用して巻数・ページ数を記載する。M.Heidegger.*Sein und Zeit*, Niemeyer, 18Aufl., 2001. 以下略号（SZ）・*Gesamtausgabe*, Klostermann. 以下略号（GA）

（2）『存在と時間』における世界開示の限界は現存在の目的企投によってかたちづくられる。このことは、本来的な目的企投である「死への先駆」が現存在の有限性の性格として捉えられていることからも明らかである（SZ, §62）。

（3）「基礎的存在論とメタ存在論はその統一において形而上学の概念をなしている。しかしこのことの内に、第一哲学と神学としての哲学の二重概念によってすでに先に序論で言及された哲学自身の根本問題の変容が表現されているにすぎない。」（GA26, 199）

（4）「無はそれ自身を不安のうちで露呈する」（GA9,113）のだが、ここで「無」（Nichts）とは、「存在者の一切の否定」であり「存在者ではない」ということである（GA9,128）。

（5）ジャン・リュック・マリオンは『存在と時間』における不安は世界と対照させて現存在という一存在者へと還元を施すのに対し、現存在をも含めた全体としての存在者の只中における現存在が露わになっているという特徴を指摘している。（「存在者と現象」、ジャン・リュック・マリオン編『現象学と形而上学』所収、三上真司他訳、法政大学出版、1994年、254頁）

（6）Otto Pöggeler: *Der Denkweg Martin Heideggers*, Verlag Günter Neske Pfullingen, 1963.

（7）『存在と時間』では現存在の自己目的であった企投の対象が後に世界へと変更し、企投が「世界企投」になっているとフィガールは指摘している。Vgl. Günter Figal: *Martin Heidegger zur Einfuehrung*, Junius Verl., 6., ergänzte Aufl., 2011, S. 105f.